

特別予算による入学前英語教育の導入について

Report on the Introduction of Preparatory English Course for Students before their Entrance

安藤 光史†
Mitsunobu ANDO

Abstract: The Student Support Center introduced the preparatory course of English Language tentatively for students before their entrance in April 2012. They were part of the students who were admitted by recommendation. These students studied English Basic Grammar for a month before their entrance. This is a report on how and why the course was introduced and about the contents of the course. The author will answer the following four questions:

1. What is the teaching material selected for the course?
2. How did the students learn in the course?
3. What was the effect of the course on the students?
4. Why is it important to learn Basic Grammar?

はじめに

平成24年度学習支援センターでは、特別予算を得て、懸案であった英語の入学前教育を試行的に導入した。対象としたのは一部推薦入試の合格者であるが、有料であるため(受講料の一部を本学が負担)、受講希望者を募って実施することとした。本学では久しく推薦入試合格者全員に対して入学前に数学の添削指導を自前で行ってきたが、それに英語が加わったことで、入学前教育が一步前進したと思われる。

さて本稿では、今回導入した講座について1年間を振り返り、以下の項目にしたがって報告したい。

1. 講座内容(DVDによる講義、テキスト、確認テスト)の紹介
2. 講座の実施結果(受講者の学習態度および成績)の分析
3. 受講者の入学後の成績追跡調査の結果報告
4. 基本英文法を学ぶことの重要性についての私見

1. N社の教材「ベーシック英語」

どのように教材は決まったか

推薦入試は、早いものでは10月に、遅いものでも12月には合格者がきまる。合格者には合格が決まってから入学までに3~5ヶ月という長期にわたる自由な時間が生じる。そもそも大学が実施する入学前教育はこの間に、

合格者が緊張感を失わず勉強をつづけ、学力を伸ばしていくことにその目的がある。したがって、以下の点を念頭において教材選択を行った。

- (1) 入学までの時間に見合った分量が確保されること
- (2) たんなる力試しではなく、新たな学力が身につくこと
- (3) 基本的な項目が片寄りなく網羅されていること
- (4) 当該科目を苦手とする受講者にも平易な指導がなされること

以上を考慮し、教材や指導内容については本学英語教室の意見も参考にしながら、N社の教材「ベーシック英語」を選択した。これは基本英文法の復習を指導の内容とし、DVDを主教材とするボリュームのある講座である。

教材の内容

(2)については特に重視した。受講者の現時点の学力の範囲内でテストを繰り返して評価し、受講者個々の弱点を指摘するだけの教材では不十分である。学校や学習塾での学習のように基礎事項を丁寧かつ効果的に教え、英語が好きになっていくような教材が好ましい。その点、「ベーシック英語」は受講者が、DVDで1回90分の講義を受け、「確認テスト」を行い、答案を郵送し、返送された添削答案で弱点を知り、必要なら何度でもDVDで学習

† 愛知工業大学 基礎教育センター(豊田市)

できる。全体は 12 講からなり(3)、分量は 1 ヶ月余十分学べる(1)。本学は 2 月 1 日に講座を開始し、ほぼ 1 ヶ月かけて完了するというタイム・スケジュールで実施した。分量は、当初はむしろ受講者が最後までたどり着けるかと心配したほどだが、後ほど述べるようにそれは杞憂であった。講座開始後、受講者は学習の進捗状況を講座本部から電話で問われ、激励を受ける。不明な箇所は電話で質問できるし、「確認テスト」の提出が滞ると督促・激励の電話がかかることになっている。もちろん講座終了後、DVD は受講者の所有になるので入学後も繰り返し学習することができる。

なお、本講座 12 回の内容は以下の通り。

第 1 講 品詞・文型, 第 2 講 文の種類, 第 3 講 受動態, 第 4 講 時制の基本・助動詞, 第 5 講 現在完了形, 第 6 講 不定詞, 第 7 講 動名詞, 第 8 講 分詞, 第 9 講 接続詞, 第 10 講 関係代名詞 A, 第 11 講 関係代名詞 B, 第 12 講 比較

英語の骨格をなす文法項目によく絞り込まれていて、高度な仮定法や話法などの項目は省かれている。基本重視の姿勢が貫かれているが、これらの項目の理解が十分なされたなら、今後の発展は比較的容易であろう。

主教材の DVD では、上記の項目が、講師の平易で、親しみある、ユーモアに富んだ語り口で進行していく。若い学習者を飽きさせない口調がよい(4)。黒板にチョークという昔ながらの教授法も魅力ある。講師の解説を聞く、整理された板書をノートに写す、練習問題をやって、その解説を聞き理解を深める。受講者が筆写したノートはそのまま手作りの参考書になるだろう。オーソドックスな授業で、奇を衒ったところはない。そういう授業を受けたあと、「確認テスト」を行い、授業 2 回分をまとめて郵送する。添削された答案を受け取って、理解度を確認する。これを 6 回行う。これが講座のすべてである。学校の授業のように、たまには講師のちょっとした脱線や雑談も聴ける。雑談といってもベテラン講師の話は、大学に入ってから的心得などのアドバイスであったりするわけで、受講者にとってはためになったはずである。

2. 受講者の受講状況と結果

本講座受講の対象者となったのは一部推薦入試の合格者で、受講希望者を募ったところ、131 名が受講した。1 回 90 分の授業を 12 回受けて「確認テスト」を送るという一連の課程を満了した受講者(提出率)は、**98.7%**であった。「ベーシック英語」を実施した他大学の全国平均が 90.7%であったのに対して、本学学生は努力したといえる。受講態度という点では、講座本部から、「受講姿勢は極めて真面目」とお褒めの言葉をいただいた。本学学生の普段の授業への取り組みは総じて真面目であると筆者

は感じているが、このことが入学前教育からも浮き彫りになった。

では、成績はどうであったか。これも全国平均と比べてみる。本学学生の 12 回平均が **35.9 点**、全国平均が 37.3 点(50 点満点)。各回の平均点では、最大で 2.9 点、各回ほぼ 1 点前後低いことが判明した。第 5 講「現在完了形」において全国平均を本学が 0.1 点上回っている。反対に 2.9 点下回ったのは、第 9 講「関係代名詞 A」。全国平均は、文系大学も多く含まれているはずだから、全体としては、理系が大半の本学学生はよく健闘したといえる。わずかな差ながら文法項目による点差は入学後の指導の参考になるかもしれない。

本講座では、受講者の受講前後の学力変化の様子を知るために、「プレテスト」と「アフターテスト」を課している。その結果、本学学生の成績推移は、100 点換算で **16.6 点**の上昇(全国平均では、12.8 点上昇)となった。またこの両テストの受験率でも、本学学生は全国平均を上回った。プレテストでは、本学 **93.9%**に対して全国 92.5%、アフターテストでは、本学 **91.6%**に対して全国 84.2%。全国平均でアフターテスト受験率が大きく落ち込んでいるのと比べて、本学学生が最後まで本講座をやり遂げたことがみてとれる。これは、この講座が、受講者の勉強意欲を刺激し、その結果、最後まで講座への関心が薄れなかったことを示していると思われる。これが筆者のたんなる印象ではないことを、次に、N 社と学習支援センターそれぞれが実施した受講者へのアンケート調査の結果から検証してみる。

受講者アンケートの結果

学習支援センターが独自に実施したアンケートでは、「授業の難易度」および「添削問題の難易度」を 5 段階に分けて訊ねた上で、「感想の自由記述」を求めた。授業と添削問題のそれぞれ難易度を訊ねる質問への回答は、ほとんどの受講者が「ちょうど良い」を選び、わずかに「やや難しい」「やや易しい」が混在するという結果であった。講座の難易度は適切であったと学習支援センターでは判断している。「感想の自由記述」については回答が重複するので、講座本部に寄せられた回答から、受講者の生の声を聞くことにしよう。回答を寄せたのは、受講者のほぼ全員。受講者は異口同音に受講してよかったと喜びの声を寄せている。(文章表現の誤り、誤字・脱字等は訂正してある。同趣旨の回答は省略し、特徴的なものを採取。)

[肯定的な声]

- ・ 受講前と比べ英語の文法が分かるようになった。受講してよかった。
- ・ 学校での授業より分かりやすかった。

- ・ 先生の話が面白かったので、楽しく学習できた。
- ・ 講師の教え方が分かりやすかった。
- ・ またこの教材を使って復習していきたいです。
- ・ 英語は苦手だったが、とても分かりやすい教え方だった。基礎ができてきた。
- ・ DVD なので、好きなタイミングで学習することができた。
- ・ (文法項目別なので) 自分の苦手なところがどこなのか分かった。
- ・ 英語がまったく分からなかったのが、なんとなく分かるようになった。もう一度やり直せば、きっと今よりも理解できるだろう。
- ・ うろ覚えだったり、あやしかったところをしっかりと復習できた。ペースが自分に合っていて、順調に進んだ。
- ・ DVD の授業を見ながら効率よく、分かりやすく受講できた。よい復習になった。
- ・ 「ベーシック英語」は奥が深く、分かりやすかった。これからの社会生活に役立つのでじっくりと学んでいきたい。
- ・ 大嫌いだった英語が好きになりましたし、逆に得意になりました。やらせていただいて感謝の気持ちでいっぱいです。
- ・ 基礎の文法だが知らないこともあり、勉強になった。基礎を忘れないよう、しっかりと復習したい。
- ・ 大変役に立ちました。何回も DVD を使わせてもらいます。
- ・ 最初は辛かったけれど、だんだん講義の長さにも慣れてきた。
- ・ 90 分間集中力を維持することは大変でした。しかしそれについていけなければみんなから遅れてしまうので、毎日の生活をただして、90 分間集中できるようにしたい。

【否定的な声】

さて、ごく僅かながら、ネガティブな意見を述べる受講者もあった。

- ・ 私にとっては少し難しかった。
- ・ 講義の進度が少し速かった。

このように受講者の声を列挙してみると、彼らの受講姿勢、あるいは彼らが重量感ある講座を完了できた理由が垣間見えてくる。整理してみると(【】内は筆者の寸評)、

- ① 映像で話しかける講師に魅力があり、教える技術が高かった。【筆者もその教授法には、まさに目から鱗の経験を何度もした。受講者のレベルに応じて発見がある。】
- ② 好きなときに、何度でも見ることができた。【DVD の利点】

- ③ 学ぶにつれて英文法に対する興味が高まり、その重要性にも気づいた。【英語の規則性・ルールに気づくことは、脳内に英語の言語回路をつくることになり、それは面白さに繋がると思われる。】
- ④ 嫌いと思っていた英語が身近なものに思えてきた。【講師の手腕】
- ⑤ 英語という科目に留まらず、大学での 90 分の講義に慣れようという意識が芽生えた。【50 分という授業時間になれた高校生にとって 90 分は長い。その時間の壁に入学前に慣れる、あるいは慣れなければならぬという意識が生まれたというのは、予期せぬ副産物であった。】
- ⑥ DVD は、中・高校で慣れ親しんだ黒板を使った授業で、インターネット利用などの器機という夾雑物の操作に戸惑うことなく授業に集中できたこと。【これは筆者の感想。このように短期集中型の講座では、不慣れな教育システムや機器が勉学にマイナスに作用する可能性がある。その点、本講座は、操作の習熟に時間を費やすことなく教材が届いたその日から学習をスタートできる。】

「難しい」「速い」といったネガティブな評価も数件あったが、圧倒的に多数を占めた【肯定的な意見】の中にその打開策がある。簡単である。つまり、DVD の特性を活かして理解できるまで何度でも繰り返し勉強することである。

では、このように本学が提供した入学前英語教育を受けた受講者が入学後どのような成績を残したのか。次に、受講者を半年追跡調査した結果を見てみよう。

3. 受講者と非受講者の成績追跡調査の結果

本講座を受講した学生が、4 月から始まった前期授業にどのように取り組んだか？わずかに 1 ヶ月余という学習が、受講者にどのような効果を及ぼしたのであろうか。元来このような学習の効果は、それほど即効性のあるものではないだろう。それを承知の上で、参考までに入学直後に行われる「プレースメント・テスト」と入学後の前期履修科目について受講者と未受講者の成績を比較してみた。さらに、本学で 1 年次に課せられる英語必修科目「英会話 A」「英語コミュニケーション A」についても検証してみる。

プレースメント・テストで比較

実は、学習支援センターでは、入学前教育講座「ベーシック英語」の導入に先立つ平成 22 年と平成 23 年の 2 年間にわたって、プレースメント・テストの結果を用いて入試別合格者の英語力を調査してきた。以下は、大きく学力試験による合格者(学力組)と推薦入試による合

格者(推薦組)の比較である。

プレースメント・テストの結果は、換算点とその得点が英検何級に相当するかで示される。結果は2年間で大きな変化がなかった。成績は学部や専攻間で顕著な差はなく、受験者の大半が英検3級レベルに集中した。ある専攻を例にとれば、英検3級レベルに、学力組が69.8%、推薦組が88.5%であった。大多数がこのレベルである。差違は英検準2級レベルと4級レベルで生じる。準2級レベルでは、学力組が30.2%、推薦組が4.9%。つまり、高校生レベルの者が推薦組では明らかに少ない。逆に英検4級レベルでは、学力組が0%、推薦組が6.5%と力不足の者が推薦組で目立つ。ここでは1専攻の結果のみを示すにとどめるが、成績分布はどの専攻でもほぼ同様であった。ちなみに、英検準2級とは高校生レベルであり、3級は中学卒業レベル、4級は中学生レベルとなる。そもそも入学前英語講座の導入の必要性を強く感じるようになったのは、この学力組と推薦組の間の歴然とした差を目のあたりにしたときであった。

さて本講座を導入してどのような結果が出たのか。

結果から言えば、プレースメント・テストの結果においては、受講者と未受講者の間に歴然たる違いはでなかった。テストの実施本部から送られた換算点の平均点で比較してみた。

- ・ 対象者で受講した者(受講者)・・・588.6点
- ・ 対象者で受講しなかった者(未受講者)・・・585.9点
- ・ 非対象者(一般推薦入試合格者等)・・・586.8点

ここでは、受講者の平均点がかろうじてよかったが、その優位性は顕著ではない。1ヶ月余の集中的学習が醸成して表面化するにはさらなる月日が必要なかもしれない。各人の努力が大切であることは言うまでもない。そのような期待をもって半年後に、「英会話A」および「英語コミュニケーションA」の成績での比較を試みた。

前期英語科目(必修)で比較

比較対象の学生を次のように3つのグループに分けて考えてみた。

- ① 受講者
- ② 未受講者(受講対象だが、受講しなかった者)
- ③ 対象外者(受講非対象、一般推薦合格者等)

本学では履修科目の成績評価は、以下の記号で表記することが学則に定められている。

「秀(S)」(到達目標を極めて優秀な水準で達成している)

「優(A)」(到達目標を優秀な水準で達成している)

「良(B)」(到達目標を概ね達成している)

「可(C)」(到達目標を必要最低限は達成している)

「F」(到達目標の必要最低限を達成していない)

「Q」(出席日数不足、試験欠席などで評価の対象とならない)

本稿では、「S」と「A」を一括りにして「成績優秀な者」(S+A)とする。「F」と「Q」は不合格、すなわち「成績不良の者」である。「Q」には学業そのものとは別の理由で授業や試験を欠席する羽目になった者も含まれるので、まずは純然たる学業評価による不合格「F」の割合を比べて示す。

まず、「英会話A」の結果。ここでは要点のみを指摘しておこう。数字は全体に対する割合である。

「S+A」で比較：①**23.7%** ②23.0% ③16.6%

「F」で比較：①**6.1%** ②7.8% ③10.38%

「S+A」での比較と「F」での比較ともに受講者(①)がもっとも結果がよかった。

次に、「英語コミュニケーションA」ではどうであったか。同様に比較してみる。

「S+A」で比較：①**39.7%** ②36.4% ③21.1%

「F」で比較：①**1.5%** ②1.8% ③5.5%

この科目においても、受講者(①)が、「成績優秀な者」の割合がもっとも多く、「成績不良の者」の割合ではもっとも少なかった。

「Q」で比較してみるとどうか。つまり評価外の結果になった者の割合は以下のようなものである。

英会話A：①**2.3%** ②2.7%
③4.5%

英語コミュニケーションA：①**1.5%** ②4.1%
③2.7%

「Q」は欠席過多による出席日数不足や試験を受けなかった者に与えられる評価である。この比較においても、両科目ともに受講者の割合がもっとも少ないという結果がでた。これは筆者の想像であるが、受講を勧められて受講した者(①)と勧められたが受講しなかった者(②)の間に、勉学に対する意欲・意識の違いがあったのではないか。大学の90分授業に対する心構えが、受講者の方によりできていたのかもしれない。プレースメント・テストの成績においても、前期英語科目の成績においても、僅かながら受講者が未受講者を上回ったことは事実である。ここに講座の効果を認めることは間違いであろうか。

補足的に述べるなら、プレースメント・テストにおける上記588点前後のスコアは、「英語コミュニケーションA」の習熟度別クラスの編成を行う際に標準クラスと基礎クラスのボーダーラインをなす得点である。これは授業レベルのある種の指標になる。今後受講者が拡大すれば、このラインは押し上げられ、本学の英語教育のレベルは確実に向上するだろう。

4. なぜ英文法学習が必要か？

江戸幕末期の二人の人物の英語力

今回導入した講座「ベーシック英語」は、基本英文法の授業と演習からなる講座である。この「研究ノート」の最後に、このような英文法の学習がなぜ必要なのかに少し触れて報告を閉じたい。

斎藤兆史著『英語襲来と日本人』からの孫引きで恐縮だが、以下に示す2つの英文を先入観のない目で読み比べていただきたい。文中の[]は削除することが望ましい箇所、()は訂正すべき、もしくは補うべき語、下線部分は文法的な誤りを含む、あるいは稚拙などの理由で注目すべき箇所を示す。

(A) The English language is so generally extensive[,] that almost all Nations speak it[,] and have books for learning it. Such a thing has given us an idea[,] to publish this small work for every body[,] beginning to learn [the] English. And this is conformed to that which has the title of FAMILLIA METHOD, published by the master R. VANDER PYL, a Dutch institutor; but only with these differences[,] to present the inflections and the conjugations in another manner, and to omit the proverbs.

We trust this work will meet the wishes of all so that they may be able to understand the (e)nglish language.

(B) O Captain how can I forget your kindness, when can I pay for your fatherly treatment? Thank God ten thousand times and (I) never will forget your name-I was sorry to hear that your ship being leaky and obliging you into port before the season. The God will direct you into the straightest and clearest path of the sea-We are lying with 700bbls. sperm oil and have to go another season on the line-Give my best respects to all your friends and your kind neighbors and my affectionate regards to your wife, Annt Amelia and Mr. Bonney family. Tell them what quarter of the world I am in. I can never forget kindness they have done to me. It is hard for me to join words together and therefore come to (a) close.

一読して感じるのは、(A)が論文調の端正な英語であること。全体として立派な英文である。若干気になる箇所がないでもない。例えば、[,]のコンマは不要、[the]も不要。下線部は誤りではないが、ふつうはthisとすべきと

ころ、(e)は大文字で表記すべき。それに対して、(B)は口語的で、唐突と未熟さを感じさせる文章である。文法上の重要な誤りもある。例えば、主語の[I]が必要、下線部のbeingとobligingは述語動詞でなければならない。最後の下線部はcloseの前に(a)が必要である。概して、この英文はいかにも不器用というか、言いたいことに英語表現が追いつかないという印象を与える。[A]は、江戸時代末の通詞堀達之助がオランダ語の原著を翻案・編集した英語参考書につけた序文。[B]は、土佐の漁師ジョン(中浜)万次郎が漂流後、救出され、アメリカ滞在7年にして書いた手紙文。

[A][B]は、書かれた目的も、書き手それぞれの生活環境も違うので、単純な比較を通して何かを言うのはいささか乱暴であろうが、危険を承知で文法学習の必要について私見を述べておく。

堀達之助は元来オランダ語の通詞であった。幕末の風雲急を告げる中で必要に迫られて英語を学び、その学習5年目にして書かれた文章が[A]である。すでに堀はオランダ語を学ぶに当たって、洋書調所どころとことんオランダ語文法を叩き込まれていたはず。この序文もオランダ語で書かれた英語の学習書を日本人向けに翻訳したものである。他方[B]は、おそらくはそれまで学問とは縁のなかった漁師万次郎が、何の下準備もないままアメリカに渡り、文字通りどっぷりとアメリカでの生活に浸かって体得した英語である。[B]を読むと、挨拶文のような箇所は流暢だが、おそらく一番伝えたかったはずの、相手の苦勞に同情を寄せる箇所はかなり稚拙な英語になっている。しまいには手に負えなくなって唐突に手紙を結ぶ結果になっている。万次郎もアメリカの学校で多少は英文法を学んだのであろうが、それは組織だったものではなかっただろうし、万次郎自身にもそれを理解し、体系化する学問の下地がなかったのではないかと。言いたい事柄に英文法をあてがって達意の英文に仕立てられた[A]に対して、言いたいことがあるのに手を拱くしかなかった[B]、その間に英文法の効用の一端が透けてみえる思いがする。

上記二名の日本人の英語については、斎藤教授の著書に負うところが大きいですが、その中で著者はジョン・万次郎の英語について、示唆的に断を下している。「日本語と英語が構造的にかけ離れた言語である以上、言語の発達期を過ぎた日本語の母語話者をただ英語漬けにただけでは、挨拶はうまくなるかもしれないが、文法的に正しく、内容的に高度な文章を操る英語使いにはならない。」英語の上達どころか、14歳から10年以上を海外で暮らした万次郎は日本語のほうがおぼつかなかったという記録もあるそうだ。よく耳にする話だが、家族で何年か外国暮らしをする場合、早々にその国の言葉を覚えて使いこなせるようになるのは子供であり、しかし哀しいかな、

帰国して暫くするうちに一番速くその言語を忘れるのも子供なのだという。文法とは頭に言語回路を作る一助になるものだと前に述べておいた。大人は言葉の規則性とかルールだとかに拘るので子供のように速やかに外国語を自分のものにできない。しかしいったん理解して覚えると、記憶に残りやすいのであろう。外国語学習の一時期に集中的に文法を学ぶ必要がある所以である。

おわりに

大学で英語を学ぶ学生たちに願うことは、ぜひとも円満な英語力を身につけてもらいたいということである。もちろん昨今は、会話力、つまり「聞く」ことや「話す」ことが重視される。しかし会話力だけが独立して存在するわけではないし、「読む」こと「書く」ことも疎かにできない大切な能力である。それは会話力を支えるものでもある。もちろん現地に赴いて直接交渉する必要もあるだろうが、インターネットの発達とともに、英文のメールを読んだり、返事を書いたりすることもコミュニケーションの重要な手段となってきたことに異を唱える人はいまい。そういう 4 つの技能の基礎となるのが文法力であることは間違いない。

本学の基礎教育において中心をなす英語科目は「英会話 AB」「英語コミュニケーション ABCDEF」の 8 科目である。それらは、科学英語の基礎であったり、リスニング（検定英語への準備を含む）であったり、文化・歴史などを題材としたリーディングであったりと、それぞれに特徴のあるコースになっているが、入学後に授業で英文法を体系的に十分時間をかけて学び直すことはなかなか難しい。時間的に無理というべきか。だからこそ入学前の、大学でのさらなる英語学習が始まる前の比較的自由な時間に、基本英文法を集中的に学んでおくことが重要になる。「英語とはこんな言語なのだ」と俯瞰できる視点を形成しておくことは、必ずや、やがて始まる授業に大きなプラスとして作用するものと信じる。「言語の学習は、文法の学習である」と英語教育分野で有益な発言の多い山田雄一郎教授は言い切る。一般に、文法と聞くと面白くないもの、面倒なものという印象をもつ人が多いのだが、同教授によれば、「発見的に学習すれば、楽しいくらいなもの」なのである。おそらく今回の受講者の好反応は、この講座に彼らなりの発見があったことを暗示するものと考えたい。

*** ** *** ** *** ** ***

英語入学前教育の導入に当たっては多くの皆さんのお力添えをいただいた。

当初からご理解と激励をいただいた後藤泰之学長、また導入過程の節目ごとに貴重なご助言をいただいた稲垣慎二副学長にまず感謝を申し上げたい。本講座の内容検討の段階で、DVD とテキストの内容を審査いただいた英語教室の諸先生にも感謝申し上げたい。多忙な業務の中にありながら欣然と成績資料作成を引き受けてくださった教務課の鮎沢智美さん、講座案内の発送から受講者名簿の作成、アンケートの作成と集計、資料整理など業務全般を精力的にこなしていただいた学習支援センターの宇佐美信子さんと小椋万祐子さんに、導入 1 年の節目にあたり、ここから感謝の辞を述べたい。

参考文献

- ・「12 愛知工業大学入学前準備教育 結果報告書」(N 社, 2013) 本講座の成績報告、アンケート結果については本報告書に基づく。
- ・斎藤兆史、『英語襲来と日本人——えげれす語事始』(講談社選書メチエ 226: 講談社, 2001)
- ・山田雄一郎、『英語教育はなぜ間違えるのか』(ちくま新書 519: 筑摩書房, 2005)

(受理 平成 25 年 3 月 19 日)